

序

私自身がはじめて微生物学の講義を受けた頃を思い起こすと、多数の微生物の名前が次々出てきて、とたんに勉学の意欲がそがれたことを思い出す。丁度その頃抗生物質が一般的に用いられはじめ、対病原微生物戦に我々人類が勝利するのは時間の問題と考えられ、医学研究は次の難題であるがんや循環器病へシフトはじめ、微生物関連の研究者が極端に減った。その結果私達が直面したことは、耐性菌の出現や、人類の存続をも危なくする新興再興感染症との出会いなど、難題の山である。最近の感染症領域の話題を振り返っても、増加し続けるエイズ、高病原性鳥インフルエンザ、豚インフルエンザ、SARS、腸管出血性大腸菌食中毒などを挙げることができる。

このような中、病原微生物に関する研究成果も積み重ねられ、学習する側にとって、これら多くの知見の中から、自分たちが必要とする知識を選択・整理しなければならなくなつた。この作業は、限られた学習時間の中でなされねばならず、初心者には困難であろう。しかも、医療の重要な領域を担う看護師、薬剤師、検査技師などの教育に現在用いられている微生物学の教科書や参考書は医学生向けのものを焼き直しただけのものが多い。

そこで本書では、皆さんがまず、微生物を正しく理解できるように「はじめの一歩」(出会い)に紙面を割いた。皆さんのが微生物学を好きになってくださいれば、今後直面するであろう感染症の諸問題に正しく対応してくれるに違いないと信じるからである。

このような初心者の微生物学の学習を助けるために、本書では過大な“丸暗記”を強いいる内容を避け、本文の記述は簡潔としイラストや表を多用した。また、微生物そのものののみならず、感染症の視点からの記述も加え、理解を深める助けとした。さらに全体的に、各論的事項を取り入れながらも総論を重視した記述とし、応用力の付くように配慮した内容とした。ただし、細菌とウイルスについては各論的記述も試みた(9章)。

なお、本書では、寄生虫も含めた内容とした。いわゆる微生物学にはふさわしくないという考えもあるが、ヒトとは別の生物によって引き起こされる病気を感染症と考えて、本書でまとめた(7章)。寄生虫学をまとめて学習する場が少なくなった昨今のひとつの対応策ともなろう。

本書の出版企画の相談を羊土社の山下志乃舞さんから受けたのが、2010年4月の学会の時であつたことを考えると、本書の誕生はこの種のものとしては、異例ともいえる速さである。その理由は、各筆者が満を持して自分の思いを本書に込めたからであろう。また、絶妙なタイミングで時々の指示を下された山下さんに負うところも大きい。さらに、長崎大学熱帯医学研究所の金子修教授にはいろいろ示唆をいただいた。これら多くの人達に感謝する。

今最終稿を手にして、多少難解な部分が残ったかも知れないが、おおむね本書の初期の思いが達成できたのではないかと考えている。今後、読者諸氏のご意見、ご批判をいただき、改めてゆきたいと考えている。

2011年6月

本田武司